山中子規　　手塚ゑつ

ゑばしとて谷の木蔭にやすらへば
　むかひの山になくほとゝぎす

山吹　　寺島とく

行く水に清きすがたをうつしつゝ
　にほふもゆかし山吹の花

首夏藤　　夏草

別れにし春のかたみと藤波も
　いつしか木々にかくろひにけり

首夏風

つくろはぬ庭もすゞしき夏木立
　小すまき上げて風を待つかな

親

我子をばよかれと願ふ親ごゝろ
　いつこの國も變らざるらん

折にふれて

心をば露けかさしよ世に出でゝ
　身はやれころもよしまとふとも

ばらの花（唱歌）　　東条子

ひらさめ晴れし　かどの垣根に
名殘のつゆの　匂こぼれて
かをるもあはれ　ばらの初花
色香をめでゝ、　手折る人もと
守の神の　針やたびけん
道行く人も　かへりみながら
手にだにふれず　今日も昨日も
かくてはやすく　散るまでを見ん

卯の花　　同人

時ならぬ　雪といひふり

音たてぬ　波とかけつゝ
昔より　めでし卯の花
今もなほ　めづる卯の花
朝露に　色はかゝやき
夕月に　光にはへり
垣のうの花。

首夏

夏くさ

去にし日に見し　花さかり
いつしかかはる　若みどり
花にはつらき　風をしも
いとゝ待たるゝ　夏は來ぬ
小川のながれ　ゆるやかに
暑からぬ程の　日はさして
はらから二人　衣かゝけ
目だかすくふも　おもしろく

若葉のかげに　行きかひて
遊びにくらす　夏は來ぬ

螢

夏くさ

庭の木たちに　只ひとつ
露の光と　見えつるは
暗を照らして　飛ぶはたる
いつ地の露に　わきてけん
我庭ちかく　こがれきて
暗を照らして　飛ぶはたる
學びの窓に　よび入れて
いざや學ばん　文のみち

初夏風

加藤ひな子

みどり涼しき　夏木立
青葉をわたる　ゆふ風に
ひとりたもとを　吹かせつゝ